

「リウマチ性多発筋痛症 間質性肺炎手記」 匿名希望 65 歳

2013 年 6 月 23 日

「間質性肺炎は治る」 間質性肺炎と関西の大病院への疑問 他リウマチ性多発筋痛症

(ご存知のように、現在公式に認められている病名は 23000 種類ほどあります。病名のつけ方には原理原則が全くありません。本来病名は少なくとも原因を少しでも示唆するものでない限りは、ただ単に医者同士が、あるいは患者同士が何となく分かり合える記号に墮落しています。なぜこのような意味のない病名が氾濫するようになったのでしょうか？ 答えはいくつかあります。まず第一に何よりも病気自体が何であるかということ、昔の人は知ることができなかつたからです。ただただ人間にとって都合の悪い肉体の状態や心の状態に対して異常である状態、つまり見たり聞いたり触ったりしたときに知覚できる不都合な症状を単純に病気と考え、その症状に合わせてその原因を知らずして人間は病名を作ったものですから、その結果現在なんと 20000 以上を超える病気があるようになったのです。最初にそのような異常な症状を見つけた人に名誉を与えるために、見つけた人の名前を病名としたことがあるぐらいです。しかも今も人名のついた病名がたくさん残っています。

それでは正しい病名とは何でしょうか？あらゆる現象には必ず原因があるということを人間が分かりだしてから、病気、つまり異常な症状も原因があるということを追究し始めて、初めて正しい病気の名前がつけられ始めたのです。つまり最初に知られた病気の原因は細菌であるということが分かり始めた 19 世紀の終わりから正しい病名がつけられ始めたのです。つまり原因が明らかになる病名がつけられ始めたのです。

さあ、病気の原因を探究し始めて、初めて正しい病気の治療が出現したのです。人類が急速に人口を増やし寿命を長くしたのも、人類を殺す原因は感染症を起こすウイルスや細菌や原虫であるということが分かり、これらのを病原菌を殺すためには人間の免疫が一番大切であるということが分かり、免疫を助けるための栄養状態を改善し、かつ免疫を補助するワクチンや抗生物質が全世界に広まっていったのです。そのために現代の文明社会においては病気で死ぬ人がなくなりました。2050 年には世界の人口は 100 億を超えるかもしれないといわれだしました。寿命も 90 を超えるのではないかと予想する学者もいるほどです。

にもかかわらず、なぜ今なお 20000 以上の病名という幽霊が世界中を席卷しているのでしょうか？その答えは極めて簡単です。病気は人間にとって不必要な異物が侵入しない限りは絶対生じないという原理原則が完全に無視されているからです。実は医者たちに見過

ごされてきたもっと重大なポイントがあります。何でしょうか？異物が入るだけで病気が起こるわけではないという原理原則です。あくまでも病気の原因である異物を患者の免疫が認識し、それを排除するための免疫の戦いが無い限り病気は起こらないのです。こんな真実を無知な昔の人たちは知るわけはなかったのですが、残念ながら現代のような科学が進み教育を充分受けている一般大衆も、今なおほとんど病気の定義さえ知らないのです。いや、医者も知らないのです！

皆さん、耳を澄ませて聞いてください。正しい病気の定義をしてあげましょう。『病気とは人体に不必要である異物が侵入したときに、それを免疫の遺伝子が認識し、排除しようとする正しい反応である。』これが病気の定義なのです。ついでに正しい医療とは何かについて定義してあげましょう。『正しい医療は病気を治すこと』です。それでは病気を治すということは何かについても定義してあげましょう。『正しい医療とは、病気の原因を免疫の遺伝子が処理して、①原因を除去するか②殺すか③共存するか④封じ込めるか、の手伝いを医者がすること』です。同時に原因を①～④までの状態に処理することが、病気を治すことであります。それでは、私はどのようにしてこの患者の間質性肺炎のみならず、リウマチ性多発筋痛症を正しく原因を知り、正しく治療し、最後は完治させることができたのでしょうか？

まず一般論として、現代文明に残された最後の病気を起こす原因は何であることを説明しましょう。大量に毎日毎日摂取され、気がつかない異物は何だと思いませんか？言うまでもなく、人類が毎日毎日、便利さと金儲けを求めて作り出している 15000 種類以上の化学物質であります。人類は過去 200 年で 7500 万種類もの化学物質を作り、知らぬ間に人体に空気や飲食物を通じて絶え間なく放り込んでいます。化学物質のない文明生活を想像できますか？異物はこの化学物質だけにとどまらないのです。世界中のどの医者も気づいていないすごいウイルスがいるのです。このウイルスはひとたび人体に感染すると、免疫が落ちるたびに人体のあらゆる神経組織に増殖し、免疫が戻ったときにこの免疫とこのウイルスが戦い始め、様々な病気を引き起こすのです。さて、皆さん、このウイルスの正体は何だと思いませんか？ヘルペスウイルスです。ヘルペスウイルスは8種類あります。このヘルペスウイルスこそ、人間の免疫が殺しきれない唯一のウイルスなのです。ヘルペスについては、ヘルペスのコーナーを読んでください。

この患者さんの間質性肺炎とリウマチ性多発筋痛症をどうして私が治すことができたのかお分かりでしょう。まず、これらの病気の原因を全て私が知っているからです。さらにこの病気の原因を誰がどのように処理すれば治すことができるかということをも知っているからです。治すのは医者でもなく薬でもなく、患者自身の免疫の遺伝子であることをも知っているからです。なぜ私だけが知っているのでしょうか？不思議に思いませんか？何も不思議ではないのです。私のような老いぼれ爺の医者が知っていることを、日本の大学受験の偏差値の1～2番を争う京大医学部の教授先生が知らないと思いませんか？知らないわけではないのです。ただ言えないだけです。なぜ言えないのでしょうか？資本主義医療が

世界を支配しているからです。資本主義医療とは何でしょうか？病気を治さなくても医薬業界にお金が儲かる医療のことです。大学教授が私を同じことを言い、私と同じように病気を治してしまえば、薬も医者も全くいらなくなってしまうからです。だって、病気を治すのは医者でも薬でもなく、38億年かかって進化した完璧な免疫の遺伝子なのです。

私のホームページを読めば絶対に治らないといわれている病気が、医原病であるリバウンドを耐え切れることができれば、全て治していることがお分かりになるでしょう。私が治しているのではなくて、患者さんの免疫の遺伝子が治していることを証明するために、患者さんに手記を書いてもらっているだけです。私の全ての病気に対する松本理論は極めて簡単なのです。免疫の遺伝子に悪さをするな！免疫を手助けする唯一の方法である漢方と鍼灸を用いる中国医学を駆使し、ただただ患者の免疫を手助けするだけで、患者さんの免疫が治してくれただけです。巷の新聞によく書かれているように、漢方と現代医学の併用などというのは何の意味もないことなのです。なぜならば漢方を免疫を上げるだけである一方、現代医学の薬は免疫を下げるだけですから、治るわけではないのです。漢方を使えば、ワクチンと抗生物質と抗ヘルペス剤を除いては、絶対に現代医学の薬は使ってはならないのです。ただ極めて簡単なこの原理原則を毎日の診療で行っているだけなのです。

松本理論はただ単に患者の免疫の真実を、患者さんに教え、病気を治すのは自分自身の免疫であることを知らせるだけなのです。実は患者自身が間違った免疫を抑えるホルモンを作っていることに気がつけてもらいたいのです。それはステロイドホルモンです。いかにステロイドホルモンを出さないかが、自分で自分の病気を治すコツなのです。従って、最もストレスの少ない生活、つまり自分の副腎皮質ホルモンであるステロイドホルモンを出さない生活をできるように私がアドバイスするだけなのです。一言で言うと、他人の幸せを自分の幸せにするだけで、ストレスはなくなるということを十分に納得させ、実践させるだけなのです。他人の幸せを自分の幸せと感じ取ることは、病気を治すのみならず、同時に最も幸せな人間になれるのです。

皆さん、原因が分からずして病気を治すことができますか？不可能です。にもかかわらず、20000以上の病名のついた病気のほとんどが原因が分からないといわれているのです。この病名に対して医者は何をしているのでしょうか？ステロイドか、もしくはステロイドと同類の薬を出すだけです。なぜでしょう？異物と戦う免疫の働きをこのような薬でなくしてしまえば、みかけの症状がなくなるからです。

原因が分からないのに手を出すことができるのは、医学に100%無知な愚かな患者を騙すためなのです。38億年かかって出来上がった神なる免疫の遺伝子の働きを抑えれば、症状はたちまち消えてしまうので、愚かな大衆は嬉々として医者に頭を下げ、お金を払ってくれるのです。しかし病気の根源である原因は除去されずにいつまでもいつまでも体に残るのです。しかもこれらの治療薬と称する免疫を抑える薬は、全て患者の免疫の遺伝子の発現を抑えるだけですから、必ず遺伝子が修復され再び激しい症状が出てしまうのです。つまり医原病が永遠に続き、医薬業界は永遠に繁栄するようになっているのです。悲しい

ことです。病気を治してしまえば、医者の仕事はなくなり、薬も必要ではなくなり、医薬業界は廃業する以外することはなくなってしまうのです。

それではこの患者さんの病気の原因と、免疫がどのようにこの病気を治していくのかについて、もっと具体的に話を進めましょう。まず、この患者さんの間質性肺炎の原因は何だと思いますか？この患者さんの場合は、長期にアロエを熱心に摂取したためです。このアロエは現在でも世界各国で薬として用いられ、日本では、民間療法としてアロエの汁を火傷やひび割れ、赤切れ、切り傷に用いたり、アロエの葉っぱの汁を咳や喘息に使ったり、ときには胃薬として内服したりしている人がいます。外用、内用、様々な使い方ができるので、アロエは“医者いらず”とも呼ばれています。滋養強壮薬や緩下剤としても売り出されています。彼はこのような風聞を耳にして、元気をつけたいために一生懸命アロエの効用を信じ飲み続けたのです。このアロエの成分が、彼の体で処理できずに、肺の結合組織にたまり、免疫は IgG で処理すべく膠原病を起こしたのです。この間質性肺炎を治すにはどうしたらよいのでしょうか？まず原因物質であるアロエをやめさせることです。原因物質を摂取することをやめると、肺の間質でアロエの化学成分と戦うことがなくなります。原因がなければ病気は起こらないからです。

次にリウマチ性多発筋痛症の原因は何でしょうか？リウマチの原因もアロエの化学成分です。このアロエに対して、関節の結合組織でも免疫は IgG で排除すべく、膠原病のひとつである関節リウマチを起こしたのです。実は彼の関節の痛みは、リウマチによるものよりも、多発性筋痛症を起こすヘルペスウイルスと関節の神経での戦いの方がはるかに痛かったのです。このヘルペスが多発筋痛症の原因だったのです。まさに筋肉の奥深くまで入り込んだ神経に増えたヘルペスウイルスが、キラーT 細胞や NK 細胞と戦いだし、痛みとして感じられたのです。このウイルスを抗ヘルペス剤で増やさないようにし、自分の免疫で殺せるだけ殺して残りのヘルペスウイルスを神経節に封じ込めればいいのです。これらの一連の働きは全て患者の免疫の遺伝子が指揮し、最後は患者自身の免疫の勝利となるのです。）

タイトルは間質性肺炎が主となっていますが、実は私が松本医院を知り 2012 年 11 月 2 に初めて治療に訪れたのはリウマチ性多発筋痛症でした。

しかし図らずも松本医院で関西の大病院で経過観察中だった間質性肺炎も後から診てもらった事になり、又私自身苦しみに苦しんだリウマチ性多発筋痛症よりもっと怖い思いをし、患者様の手記には間質性肺炎の手記は全く載っていない、リウマチ性多発筋痛症は沢山の手記が有り代弁されていると思われ、また関西の大病院で受けた間質性肺炎の手術検査に疑問を感じていたのでタイトルをこの様にしました。

(間質性肺炎の原因は 100%薬剤です。彼の摂取したアロエも体に良いという意味では、健康保健薬として彼は飲み続けていたのです。なぜ薬剤の副作用として間質性肺炎が起こるのでしょうか？副作用の本を読んでもらえればすぐ分かることですが、免疫を抑える薬

のほとんど全てに副作用として間質性肺炎が挙げられています。残念なことに、現在の薬の副作用の書物には、ひとつひとつの薬がどのような副作用を起こすのかについては詳しく書かれているのですが、薬の副作用のために生じる病名から薬の名前を検索できないのです。つまり「間質性肺炎を起こす薬のすべて」という本は一冊もないのです。廣川書店から出ている『薬剤師のための常用医薬品情報集』をパラパラめくってみますと、ほとんどの薬に重大な副作用として間質性肺炎が載せられています。なぜだと思いますか？

まず免疫を抑える化学物質は、どこで免疫を抑えると思いますか？全て結合組織（間質）です。ここでまず結合組織や間質の名前の意味について説明しましょう。まず結合組織は細胞と細胞を結合している組織のことでありますから、すぐにお分かりになるでしょう。それでは間質というのは、どのようにしてつけられたのでしょうか？間質に対して実質組織という言い方をするときがあります。それでは実質とはなんのでしょうか？細胞そのものを指します。間質組織とは実質の間にある組織のことを意味します。従って“細胞の間にある組織”を間質というのです。これで結合組織と間質は同じだということがお分かりになるでしょう。

ついでに膠原病の“膠原”とは何でしょうか？膠原とは「膠(にかわ)の元」という意味です。それではなぜ「膠の元」と名づけられたのでしょうか？結合組織は線維からできています。この線維を集めてみると膠（ゼラチン）を生ずるので、この線維を膠原線維といいます。このゼラチンは、昔は接着剤によく使われた膠（にかわ）のことです。この膠原線維は強靱で細胞を支えて、細胞の実質組織が簡単にねじれたり歪めたり折り曲げられたり破れたりできないように支えているのです。線維というのは、曲げてもねじっても元に戻る強さがあるのはご存知でしょう。もちろん糸よりもはるかに強靱ですから、細胞の組織の形が変わらないように支えているので、結合組織を支持組織という言い方もします。この膠原線維の主要成分はアミノ酸からできたコラーゲンであります。

それではこの膠原線維はどの細胞が作るのでしょうか？線維芽細胞です。この線維芽細胞に山中4因子を入れてiPSを作るのはご存知でしょう。なぜならばこの線維芽細胞はあらゆる組織に大量にあるからです。それでは膠原病という名前はどのように付けられたのでしょうか？まさに膠原線維でできている結合組織で炎症が生じている病気を、1942年にクレンペラーが初めて見つけて膠原病という病名をつけたのです。もちろん昔も今も原因不明の病気であり、後に間違って自己免疫疾患という名前も与えられました。本当は化学物質がこの結合組織に蓄積され、この化学物質がハプテンとなり、様々なキャリアタンパクと結びついた複合体が膠原病の原因であるので、膠原病の正しい病名は化学物質汚染症というべきです。この膠原病を治した手記が私のホームページに満載されています。まさに膠原病は治る病気である証拠なのです。今も毎日毎日実際あらゆる膠原病を治しています。言うまでもなく間質性肺炎もリウマチも膠原病のひとつなのです。自己免疫疾患はないという論文を読んでください。現代の病気の原因で一番多いのは何でしょう？先ほど述べたように、化学物質であります。この化学物質が結合組織、つまり間質に溜まり、これをIgE

で戦うときにアレルギーといい、IgG で戦うときに膠原病ということも既にご存知でしょう。

さて本論に戻りましょう。なぜ膠原病の薬の副作用の全てに間質性肺炎やリウマチが起る原因となるかについて説明しましょう。まずこのような薬は化学物質であり、かつ免疫の遺伝子の働きを抑えます。このような薬は膠原病を起こしている結合組織に運ばれ、そこで戦っている免疫の働きをさせなくします。このような免疫抑制剤は毎日毎日大量に飲み続けると、徐々に処理されなくなり、結合組織に蓄積していきます。しかも毎日毎日飲食物から入ってくる化学物質も一緒に溜まっていきます。もともと抗リウマチ薬は関節の結合組織で戦っている免疫の働きを抑えるためだったのですが、他のあらゆる種類の結合組織にも溜まっていきます。すると免疫の戦いはさらに別の組織の結合組織に拡大していきます。つまりミイラ取りがミイラになってしまうのです！病気を治すつむりの薬が、さらに大きな病気を生み出すという結果に終わってしまうのです。これが現代医学の病気作りのメカニズムであるのです。

今も思い出す症例があります。リウマチで10年間もリウマトレックスを飲んで、間質性肺炎になってから、医者に「ステロイドでしか、リウマチも間質性肺炎も治すことができないから」と言われ、私のホームページを読んでこられた非常に賢い患者さんがおられました。間質性肺炎の症状は一切ないどころか、間質性肺炎に特異的に見られるKL-6の値も徐々に良くなったのですが、それでもやはりリウマチのリバウンド現象が激しく、関節の痛みが激しく、いつの間にか来られなくなった患者さんのことです。間質性肺炎よりも、はるかにリウマチの治療の方が難しいと感じた症例でした。医者たちは間質性肺炎を一生治らない病気だと言いまくっていますが、実は自分たちが病気を作っていることを一切認めようとしなのが残念です！

今までも様々な薬を飲んで、肺のII型細胞が炎症の際に特異的に産出するKL-6が高くなり、当院に受診された人がゴマンといます。ところが全く症状がないので、今まで患者が用いてきた現代医学の化学物質である薬をやめさせ、その代わりに免疫を上げる漢方薬を用いてほとんどの人が良くなっていきました。本人の自覚症状がないので、間質性肺炎の手記を書いてとお願いするのも気が引けたので、今まで手記を書いてもらった人がいなかっただけの話です。昔は膠原病の中で一番怖いのは間質性肺炎だと思っていましたが、数多くの患者を診ている中で、間質性肺炎を起こす原因さえ除去すれば自然と治るという確信があります。やはり膠原病で一番怖いのは慢性腎炎です。慢性腎炎については、慢性腎炎の論文を読んでください。

次回は間質性肺炎とは何かについて本格的に書きたいと思っています。

今日はここまでです。2013/07/18

松本医院で治療を受けられているリウマチ性多発筋痛症を患われた患者様の手記でも書

かれています。私も、発症した時から同じようにその恐ろしい痛みと苦痛に襲われ、そして医師から一生治らないと絶望的で無慈悲な宣告を受け、そのショックと絶望で人生観は悲慘なものに一変していました。しかし私は、其の時も関西の大病院の経過観察中だった間質性肺炎に、もっと深刻で不安な思いを抱いていました。

間質性肺炎が見つかったのは四年余り前になり関西の大病院で検査を受け、その後今日まで経過観察を受けていました。私の程度では症状も苦しさも全く無くリウマチ性多発筋痛症の様な痛みが有る分けても無く病気は無い様なものでしたが、診てもらっていた関西の大病院の病気に對する説明からでは、此の病気に對して漠然とした強い不安が残り、気持ちの整理が着かず、ずっと身体に魔物を抱えた様な不安を抱いていました。

なにが不安かと言えば肺の方は悪くなれば死に直結し、死な無いまでも病気が進むだけでも悲慘だからです。リウマチの方も（松本医院に来る前に行っていた関西の大病院からの診療所ではリウマチ性多発筋痛症とは言われずリウマチと言われていた）関節の癒着や寝たきりや一生治らず薬で抑えるのだと言うような説明を受けた時のショックと絶望は大変なものでしたが、肺の方がやはり怖かったです。リウマチ性多発筋痛症を患って苦しんでいても、私の中では第一に間質性肺炎が念頭にありました。医者に掛かる時は、間質性肺炎に悪影響があつてはいけないと思ひ間質性肺炎の有る事を先ず言ってきました。悲慘で怖く不気味な病気だと思っていたので口にするのも怖く、人には言うのも恥ずかしく、医者の事前調書に書き込むのも恥ずかしくて書きにくいものでしたが、治療の悪影響を受けてはいけないから医者には言ってきました、その様な心理状態でした。勿論、松本先生にリウマチ性多発筋痛症の治療を受ける時、事前調書にも書き込み、先生にも言いました。この様なわけで、松本医院の初診の時、血液検査で間質性肺炎の状態を確認する為、間質性肺炎を調べる KL-6 値も調べられました。

私は、間質性肺炎が松本医院の治療の範囲に入り、そして治療が行われているとは認識していませんでした。しかし皆さん読んでおられる松本先生の論説の中で、間質性肺炎ついて少し触れておれ、リウマチの治療と間質性肺炎の治療が同じと読めるところがありました。そうした事から間質性肺炎にも効果が期待されると、漠然とした感じが有った様に思いますが、あえて治療をお願いしていませんでしたので、検査はリウマチ性多発筋痛症との兼ね合いで知っておく為の一応の検査位に思っていました。検査は初診の時と期間を置いてもう一度行はれ、検査の結果、間質性肺炎を示す KL-6 数値はどちらも基準値以下でした。それで先生は間質性肺炎を無しとされ、以後検査は打ち切られました。

しかし私には気になる事が有りました。松本医院に来る直前まで、関西の大病院から経過観察をしてもらっている診療所で一ヶ月余りですが、リウマチ性多発筋痛症の治療をしていましたが、プレズニン（ステロイド）が使われていました。ステロイドは松本先生の理論で学んだ通り、見せ掛けの効果と止めればリバウンドする薬です。そして一般医療では間質性肺炎にも使われる薬です。勿論、松本医院では使ってはならない薬として一切使われません。（知っているなら何故プレズニン（ステロイド）を飲んでいたのかと言う事にな

りますがステロイド等免疫抑制剤の害は松本医院を知って以後短期により明確化したのです)

松本医院に来る前の診療所でリウマチ性多発筋痛症の治療を始めるに当たり間質性肺炎の状態を見るため2回のKL-6 数値が調べられ、その結果それ程高くは無いでしたがはっきりとして基準値以上だったのです。2回目は既にプレゾニン（ステロイド）を飲んでいたので1回目の数値より少し下がっていました。以後KL-6の検査は無く一ヶ月程が経ち松本医院で又行ったわけです。

松本医院でのこの検査の結果やはり基準値以下つまり正常値になっていました。これは松本医院に替わるまで診療所で飲んだプレゾニン（ステロイド）が効いたせいだという気がしました。そして2回目の検査の数値がほんのわずか上がっていた事も気になりました。これはリバウンドしていて間質性肺炎が治っているわけではなく放っておくことができないと言う気がしていました。

正常値でもありその時はリウマチ性多発筋痛症も一番きつい時でしたので言いませんでしたが、其のまま放っておくことは絶対できませんでした。

二ヶ月程してから松本先生に再度検査して貰う様にお願ひし、良く引き受けてもらいました。間質性肺炎の治療はリウマチ性多発筋痛症の治療の継続だけでそれを継続する事が治療で何か治療が変わった分けではありませんでした。

後はKL-6の血液検査で経過を見ていくと言うものでした。血液検査の結果は大幅ではありませんでしたがやはり完全に基準値以上に上がっていました。

完全にリバウンドしていました。私は、リウマチ性多発筋痛症の治療の煎じ薬、鍼灸を今までより落ち度の無い様に行いました。自分善がりですが、

特に背中によく鍼灸をしました。肺と背中は近いから効く様に思ったのです。結果は二回目の血液検査のKL-6 値が下がっていたのです。

正常値すれすれでした。喜びは大変なものでした。

これで下がってき正常値になるのだと思っていました。しかし三回目の血液検査では又しても上がっていました。検査の無かった二ヶ月余の間の推移から今の此の推移の意味を考え様にも不明ですから其の術もありません。ただもうリウマチ性多発筋痛症の治療の継続を落ち度の無い様に行うだけでした。

そして四回目の血液検査をまつばかりでした。四回目の血液検査の結果は驚きでした少しばかりでは無い鮮やかに余裕の幅を持って正常値になっていたのです。KL-6の検査が打ち切られ再度測られるまでの空白は分かりませんが結局のところ上下しながらも下がって正常値になったのだと考えられました。正常値だと言う事は間質性肺炎が無いと言うことです。

ステロイド等免疫抑制剤により一時的に正常値に戻ったのではありません、松本先生の理論の通り、私自身の免疫により正常値に戻ったのです、完治したのです。あれほど見通しがなく不安だった間質性肺炎から開放されたのです。私は、松本医院で間質性肺炎の治

療をし、松本先生の理論を読んで間質性肺炎の正体を知りました。IG -G から IG-E へのラススイッチで治癒していくプロセスはリウマチ性多発筋痛症等の膠原病と間質性肺炎も同じだったのです、間質性肺炎も同じ膠原病だったのです。

関西の大病院で原因が説明されなかった訳も、私が、不気味な不安を持ち続けなければならなかった訳も分かりました。それはリウマチ等膠原病が原因不明とされているのと同じ理由で間質性肺炎も原因不明とされているので当然、原因の説明はできないのです、又、治す方法が分からないから当然、患者から不安も除く事はできなかつたのです。更に言うならリウマチが一生治らないとか一生薬で抑えていけくだけると患者の気持ちもはばからずに言われるのは、リウマチは直接命に関らないし直ぐには死なないからです、間質性肺炎には直接的にそう言われぬのは直接命に関する臓器に起こっていて死ぬかも知れぬから言いにくいのです、しかし怖い病気ですとか、進行するとか進行せずに済むかも知れぬとか、早い場合は日単位や週単位や月単位で進行するとかは言われ、レントゲンや CT や肺機能検査や派生する病気の為とかで MRI やそういった検査が終りなく続き患者が終わることの無い不安を抱くのです。

しかし松本病院ではこれ等の病気の原因が解明されていて、完治します。松本医院の、免疫を高める治療は病気が確実に治っていきます、その回復感の故に、他の病院で一生治らないと言われていたにも関わらず治ることが当たり前になる様になり、返って治癒の速度に不満を持ったりする皮肉が起こらないとも限らない程です。勿論、他の病院で薬害を受けた程度や病気の程度にも因るでしょうが基本的には治癒していく事に変わりないと思います。免疫が病気を治す、此の本筋を反れて病気を治す事はできません。命にロボットを代わりにすることができないのと同じです。松本先生の理論は美しく真実で命の理論だと思えます。

松本医院の治療を受けて 5 ヶ月余りが経ち、間質性肺炎は消えてしまい、床や畳に座れば絶対に起き上がれず椅子やベッドでさえ大変でしたリウマチ性多発筋痛症も 3 ヶ月程で日常生活を普通に近く送れ、5 ヶ月余り今、完治を目前にしています。これ等の事実を正確に表しているのはやはり血液検査です、以下は其の血液検査の結果です。

月日	11月 2日	12月 14日	1月 11日	2月1 日	3月1 日	3月 15日	4月 12日	5月 10日	
CRP 定量	4,74	3,53	1,39	0,37	0,17		0,11		0,30 以下
RF 定量	69	22	6	5	5				20 以下
血沈		97		77			23		
IgG	2163	2191	2034	1890	1873				870~ 1700
α 1G	3,9	3,9	3,5	3,6					1,9~

									3, 3
α 2G	11, 1	10, 9	10, 6						5, 7~ 9, 7
β G	8, 9	8, 3	8, 8						6, 9~ 10, 7
TTT	11, 0	12, 6	7, 4		5, 4				4, 0 以下
zTT	12, 2	16, 0	11, 5		12, 2				2, 0~ 12, 0
γ G		23, 6	21, 7	21, 7	20, 9				10, 5~ 20, 3
EIA 価単純ヘル ペス	109, 4	109, 0	101, 0	115, 5	127, 5		114, 0	113, 2	2, 0 未満 (-)
EIA 価水泡帯状 ヘルペス	27, 9								2, 0 未満 (-)
kL - 6	448	456			534	504	566	458	500 未満
リンパ球	18, 5	22, 7	31, 4	20, 8	21, 4		19, 2		18, 0~ 59, 0
非特異的 I g E	267	207		123					
プロテインD	38, 5								110, 0 未 満
プロテインA	24, 0	33, 8							43, 8 未 満
血糖	153	130	103		105		94		60~109
プロテイナーゼ -3	216, 4	125, 6	85, 2	47, 0	35, 7				36, 9~ 121, 0
ACTH	1, 0 以 下	9, 9							7, 2~ 63, 3

此の後に、手記の全体の半分であると言える関西の大病院で受けた検査手術の経過と一般治療の治らないリウマチ性多発筋痛症の治療を受けた事を「関西の大病院と診療所」のタイトルで載せたいと思います。

先ず言っておきたいと思いますが、此の全体の半分と言える手記を書いた後、いささかプライベートで情念的で人様に見せるべき物で無いと恥ずかしくなりました。しかし載せる事にしました。なぜなら、書いた手記は事実にすぎないのだし、この手術の必要性に付いての疑問が手記の大きな内容の一つなので、以下の理由で、短い言葉で片付けるより大きく

載せても当然と思ったからです。

その理由は、此の手術をしてもその後、治療があるとは思えないことです。リウマチ等膠原病と同じ見せ掛けの改善とリバウンドを繰り返す病気が其のたびごとに悪くなるステロイド等免疫抑制剤が使われるだけなのです。だとすれば手術は不必要だったのです。何の意味も目的も無い手術が行はれた事になります。無駄な手術でも何も害が無ければ見過ごせるかもしれません。

しかし後遺症が残ったのです。感触が残り、やや激しい運動をするとアコーデオンの蛇腹を使う様に意識的な呼吸が必要になり、痰も出るようになりました。

勿論、取り出された、医師から説明されて知った小さめの餃子二個分程の肺細胞が減少したのは言うに及びません。同じ炎症があるとされていた手術しなかった右側肺は何の感触も無く幾ら激しい運動をしても意識して呼吸するなどと言う事は無く軽快そのものです。勿論、痰も出ません。

リウマチ性多発筋痛症についても、やはりやってはならない治療が行われた現場なのでから触れずにはおかれませんでした。

関西の大病院と診療所

四年余前の2009年でした。J市の嘱託職員として勤めていました。

その職員の健康診断で肺に影があると言われました。肺は命に関する臓器だけにショックでした。周囲からも健康診断の結果を重く見る響きが取囲んでいました。工作中、診断用紙が私の事務机に届き、其の日の内に総務だったか庶務だったかから私宛に電話が有り、私はその様な課から電話を貰う覚えは無いと不吉な予感がしました。予感は当たっていました。診断用紙届きましたでしょうかで始まり箇所が肺でするので出来るだけ早く病院で精密検査を受けて下さいとの勧めでした。

私は、医療が進んでいてよく診てくれるだろうと思う関西の大病院なら良いだろうと選びました。明るく、有休を取り早速、関西の大病院に行きました。

初診は胸部レントゲン、肺機能検査、医師の診察でした。肺機能検査での肺活量は4600有りました。高校生の体育の時間に測られた時は4200と記憶していたので此の年齢になって更に増えている事になり驚きでした。此の初診の担当のTZ医師は胸部レントゲンを見、聴診器で診察し、そしてパソコンと向き合いながら、住居の変化等身の回りの変化や、鳥とよく接していないか、漢方薬を飲んでいないか、他何か薬を飲んでいないか等、立て続けに質問をぶつけられました。そしてその間何回も「大丈夫でしょう」と呟く様に私に向け言葉を差し挟まれました。告げられた診断は間質性肺炎、肺繊維症だとの事でした。私は、職場での健康診断で両肺の下部に影と言う内容を見たときから癌なら両肺同じなどと言う事は有り得ないと思っていたので、やはり合っていたと思ひ差当り安心しました。

そして当然に治療と治る見通しが普通に話されるだろうと思いましたが、そうではなく最後まで治療や治る見通しの話は有りませんでした。

肺繊維症と言う言葉も何か不気味で、不安がつのりました。間質性肺炎専門の担当医に回しますと言われ、其処でCTを撮れば病気がはっきりすると言われ何週間か先の予定日を言われ此の日の診察は終わりました。私は、肺ガンで無かった事で一応安心感を引きずって、帰りの途中少し意を得た様な気持ちで、

携帯電話から妻に連絡しました。間質性肺炎と聞きなれない病名に二人は戸惑いながら話し、ネットで調べれば分かるわねと妻は言いました。電話を切った後しばらくして妻から携帯電話に電話が有りネットで調べた結果をきかされ、私は、楽観して良いのか分からなくなりました。

家に帰り、あらためてネットで調べて全てが暗転してしまいました。

其処には希望も何も無い奈落へ向かって進んで行く様な深刻な事ばかりが有ったのです。不吉に胸騒ぎが起こり、徐々に絶望が身体の隅々に行渡って行きました。何処にも絶望からの抜け道は見出せず、ただ希望を見出すとすれば、数週間先のCT撮影の結果を待つ事でしたが、すでに病名を告げられている以上、頼りない気休めみたいなものでした。

この日以降、地に足の付かない不安と焦りが続き。ネットで病気は進行性だと書かれていたので、兄から、数週間先になるCT撮影で良いのか何か可笑しいのではないかと言われました。私も、胸部の中が日に日に悪くなっていく様な気になりました。この状況を医師に相談したかったですが、離れば、あの巨大な関西の大病院に取り付く島もなく、其の医師も見ず知らずの簡単に声のかけられない赤の他人の様に思え、選んだ病院が間違っていたのでは無いかと思う程でした。しかし私は数日後、診察の医師に電話してみました。超一流で巨大な関西の大病院の医師の多忙な勤務の中を呼び出して相手にしてもらえるのか気後れしました。まさか患者の相談を冷たく突き放す事など出来ないのは当たり前で、話は快く受け入れられTZ医師は親身に話し、ネットの情報は病気の悪い部分ばかりが書かれているのだと思いますとの返答で、私は一安心したが、私の状態がどの様なのか自分では分からない不安は残りました。TZ医師は、(病状が) 苦しい様だったら何時でも連絡して下さいと言われました。

最初の診断以降、私は毎日の様に時間を見つけてウォーキングやジョギングを交えたり短距離を全速力で走り呼吸の状態を観察しました。全く異常は感じず、全速力での走りの後の呼吸数の高まりと素早い沈静が快く感じられ、俺は何処が如何悪いのだと自問しました。しかし其の後、悪い病気とはこう言うものなのだ、知らぬ間に進行し、放置した為に取り返しの付かない事になるのだと言う思いが返ってきました。そしてガンを例に考え、ガンは痛くも痒くも無いのだ、然し気付いた時はもう手遅れなのだ。結局はこうして不安が拭い去れない落ち着かない日々が続きました。

そしてCT撮影の結果を聞く日、間質性肺炎の専門医のHD医師と初めて会いました。私は、

病気は無かったと言う結果が出るのではないかと言う思い込みもありました。

しかし残念な事にそうはなりませんでした。間質性肺炎だと告げられました。ネットには恐ろしい事が書き連ねられていましたが、それでも治る治療方が言われるものと思っていました。何よりガンで無いとの安心みたいなものが有り、妻もその様に思っていたのだと思います。妻には付き添って貰っていて傍に居ました「主人がネットを見て偉く落ち込みましてね」と気持ち緩めた感じでHD医師に妻が言いました。「実際、怖い病気なのですよ」口数の少なそうなHD医師のやや小さめの声で冷たく怖い返事がただ一言返ってただけでした。

妻の顔は一瞬にして表情が変りました。勿論、言うに及ばず不気味な怖さが私の胸を貫きました。

さらにショックで異常を思いもせず考えもしなかったとても受け入れがたい話が続きました。今後の処置として肺の内視鏡検査を行い原因の特定真菌やウイルス等が見つからなければ更に、肺組織を取り出す手術を行う事になると言われました。HD 医師の年が若く見えましたので、この様な判断をされて大丈夫かと思いました。手術は空孔手術と言うもので胸に穴をあけ手術道具を入れて行うと言うものでした。昔は胸を開いて手術していたとの事、しかし空孔手術でも大手術だと思いました。私は別の世界に居る様な気持ちになりました。

一転して診察室が無機質で死の表情に変りました。私は身体が何処も悪く無い感じでしたので大手術の宣告との野狭間で心に解決のつかないしこりが生じました。

この検査は生体検査と呼ばれ、特発性間質肺炎であるか調べるものだと言われました。特発性間質肺炎こそがネットに出ていた怖い病気でした、生存率 5 年以内、それ以上でも長くは無く、これと言った治療法が無く、ステロイドが使われるが一時的に症状が治まるが又再発を繰返し死へと繋がって行くと言うものでした。私がステロイドと言う薬名を知ったのはこれが初めてでした。

そして私は此の時、ステロイドに特発性間質肺炎の底知れない不気味さが重なり、同じく不気味でややこしい薬だと言うイメージを持ってしまいました。

此の時、先ずは肺内視鏡検査の承諾書にサインを確か求められました。

これも受け入れがたい事でした。胃の内視鏡検査と分けが違う、私は今、

息が苦しくも身体が弱っている分けでもない、肺に内視鏡を入れるなど健康な身体に重大な損傷を加えるに等しいと思いました。しかし目に見えない特発間質性肺炎の恐ろしさがありました。CT と言う超近代的なハイテック医療機器で、しかも世界にさえ誇る関西の大病院で病状を指摘されている。しかしこれも医師の傲慢な患者を無視した馬鹿馬鹿しい治療の遣り方だとして、ただただ自分の身体を信じ、せめて他の病院で此の検査で良いのか調べることも出来ました。

しかし私は弱い人間で、そうは出来ませんでした。承諾に戸惑ったが如何する事も出来ませんでした。検査を回避する方法は無いかなどの質問をした挙句、承諾しても検査は先で

何時でもキャンセル出来ると考え承諾しました。

その後、検査をキャンセルする事はありませんでした。他病院で診直すか誰か専門家に聞くかしなければキャンセルする理由が見つかりませんが、私は他病院を当たらなかつたのだし、聞ける様な知識を持っている人も私の周囲にはいませんでした。

肺内視鏡検査は夢ではありませんでした、日は刻々と迫ってきました。

漠然とした怖さがはっきりとし、覚悟を決める他ありませんでした。

検査日は数日前から検査前入院がありましたが、12月で冬であることもあり入院日直前に緊張とストレスの為か風邪気味になり、入院してからは休養が取れているにも関わらず返って風邪は進みました。検査が終わって退院した後、

風邪は直ぐに治ったので、検査に対する緊張とストレスのため風邪になっていたと思います。入院中は何人もの看護婦さんが頻繁に体の測定に来られ、

それぞれの看護婦さんに、検査に頑張って耐えるように何度もはげまされ、

それが、やはり普通の内視鏡検査で無いと言う事を表していて、

ただただ覚悟するばかりでした。

検査はHD医師とTZ医師の二人でHD医師が主でした。勿論、補助の看護婦さんも加わっていいました。検査は午後で、まだ病室に居る時、看護婦さんから、苦しみを和らげ、検査中に苦しみの為に暴れない様にする為の注射ですと説明を受けて注射されました。説明を受けたかも知れませんが私は何故か此の注射は筋弛緩剤だと思いつけています。此の注射の為に少し怖い思いをしました。車椅子に乗せられ検査室へ向か途中、注射が効いてくるのが分かりました。

周囲の物全てが動かなくなりました。妙な言い方ですが静止している廊下の壁が動かなくなり、窓の向こうの木々の枝が風で揺れているのに静止していました。枝が揺れているのは思考上分かるだけの事でした。此の静止には底知れぬ圧迫感が有り、そしてそれを如何する事もできない無力感との異様さは永久に忘れられません。私たちと周囲との位置関係は常に動いています、自分が動けば周囲との位置関係が変わるからです。そうして動いていると言う事が生きていると言うことで、此の時、完全な静止は死だと言う強い印象と危機感が私を貫きました。

検査には耐えに耐えました。時間は二、三十分でした。恐ろしい時間で痛みもしましたが、終わってしまえば何事も無かった様に終わり、嘔吐を伴う胃カメラ検査の方が苦しい様に思われました。しかし直接命に関りそして繊細な臓器の肺検査の方が怖いに決っています。そして後遺症も残る様に思います。

後日この検査結果を聞くときは本当に大変でした。

検査の結果で原因が何も掴めなければ手術しなければならない。

手に汗握り病院の前から足がすくみました。

残念ながら原因は出ず、手術せざるを得ないと言う事になりました。

私が別の方法をと、どのような質問しても HD 医師の答えは変わらず、手術しなければ今後、病気が進行して来ればどのように治療すれば良いのか分からず闇雲に治療するしかないとの事でした。この最も筋の通った説明を受け入れない分けにはいきませんでした。しかし松本医院で治療して分かった事ですが、この筋の通った説明にこそ意味が無かった事が分かりました。

なぜなら手術で何が分かろうと、病気を更に悪化させるステロイド等免疫抑制剤の使用しか後の治療方法が無かったのですから。一応、手術の承諾をその時でしなければなりませんでしたが。しかし手術だけは、その場で承諾することが出来ませんでした。再考すると言いました。

しかし私は家に帰ってからは、大変でした。気持ちは強く沈み込み其の状態では今後の生活に收拾が付かなくなってしまうのです。家庭内不和も起こりかけました。他病院で調べ直すか、で無ければ、解決は唯一手術を承諾する事でした。苦渋の決断をして、其の日に電話で承諾しました。私の承諾に対して HD 医師は「有難う」と言われました。私はこれを個人的な立場を超えた命を守る医療の思想から言われた医師の崇高な思いからだと思え止めたが、しかし直ぐに反対の事を考えました。仕事の一貫として、個人の実績として、仕事を取り込めた事の、利己的な「有難う」ではないのかと。大学病院では研究対象としてマニュアル化されているのではないかとも思いました。私は強い侮辱感と怒りのやり場がありませんでした。しかし真意を知る由もありません。

手術は一ヶ月ほど先の年が明けて直ぐと言う事になり、それまでの間、手術の説明や承諾書のサインが有りました。

仕事は仕事納めの 28 日まで勤めました。手術が数日後に控える前入院は 1 月 5 日だったので年が明けた意味は大きいでした。覚悟と諦めが交叉し鉄の重しを負った正月でした。

入った病室の病棟は、臓器移植の病棟で、目にしたものは驚きでした。

臓器移植は、時々ニュースになっている数程度のものだと思っていましたが、此処で日常茶飯時の様におこなわれていると言うことを知りました。

病室は臓器移植患者の入院で溢れていました。生体検査も臓器手術なので同じ病棟でした。病室には本当に気の毒な大きな臓器移植手術を待つ患者さんもおられました。生体検査でもやはり内臓に手を掛ける手術だなど思う事がありました。私の隣のベッドに病人の様な感じのしない普通の青年が新に入って来て、数人の医師に取囲まれ話が行なわれました。聞こえて来る話では胆道か何かその様な病気の生体検査の様で、その様な病気も生体検査されるのかと思いました。後日生体検査から帰ってきた青年は苦痛を訴え完全な病人になっておられました。

最終的な、手術の説明と承諾の確認がありました。夜遅く HZ 医師ともう一人の二人により、控え室で説明を受けました。その中で、手術で取る組織が小さめの餃子二個程の量と言われました。肺が悪いのに更に肺組織が取られるのはショックで不本意を訴えました。それに対してもう一人に強く反論され、私も言い分を言いました。超有名病院で、命にも関る大

きな手術を受けようとしている患者に悪く強い口調で言い込める事が通用している事が驚きでした。私は喧嘩しようかと思うほどでしたが今にも危ない病人になっていましたから勇気もなく顔色にも余り出ませんでした。しばらくして二人は隣の一室の様な所へ退き何か話し合っている様で会話が洩れてきました。

「此の患者何処から来とんねん」京都の方言言葉で、偉そうな、其の手の人のような口調で主治医である HZ 医師に聞いているもう一人の声が聞こえ、勿論私は侮辱を感じ、先程の事も含め蒸し返し決着させたい強い憤りを覚えたが勇気も力も無く、この様な男に検査か手術の補助を任せてよいものかと思ったり、此处で事を起こせば手術にも悪い影響を及ぼすかもしれないと思ったりし、

ちょっとした口の悪さに過ぎない、超有名病院の聖なる医療の場で不正が行われる筈がないと自分に好い様に思い込ませ、このまま何事も無く行けば正常に手術は行われるのだとして、唯々時間の経つのを待ちました。

その後二人が戻り少し用件が続き、そして何事も無く丁寧に別れる形になりました。その後、明るる日だったか二日後だったかに手術がありました。

手術は怖さの覚悟も麻痺し運を天に任せるより他ありませんでした。

今の麻酔技術は進んでいて手術そのものは眠って行われたのと同じで全く分かりませんでした。手術室の出した所には入った時と同じく妻と娘がいてくれました。寝台が止められ笑顔で喜んでくれる妻と娘に面会しました。

私は身動き一つとれない身体になっていましたが案外気はしっかり戻っていて大丈夫だと言う風に退ける様な態度をとってしまいました。

手術は夕方遅くから夜にかけての時間でしたから手術の後、何処かの一室に連れて行かれ其処での夜が明けるまで暗闇の中が大変でした。自分の状態が読み取れません、左の背中から胸の横に鈍痛が有り身体に穴を開けられ傷口が処置されているのだけはわかりました。眠ることもできず宇宙の何処かに吊るされた様に暗闇の中を唯々鈍痛に耐えました。頼りになるのは時間刻みで様子を見にこられる看護婦さんでした。この看護婦さんの様子見が無ければ闇の中、

耐えられないものでした。夜が明けると夜の暗闇の中何処に居るのか分かりませんでした。やはり一つの病室にいたのです。

身体には管が取り巻いていました。胸の横あたりに体内に一本差し込まれ他に点滴管と尿出しの管でした。此の上強い鈍痛が伴っていたのだから身動きができず、宇宙の何処かの闇の中に宙吊りなっている様だった事がよくわかりました。昼間担当の看護婦さんが来られ、具合を聞かれ、此の後の予定を聞かされました。昼前、手術をされた外科医師が様子を見に来られました。身体の中に差し込まれた体内の出血や体汁を抜くチューブを抜く話になりました。

チューブは出てきた出血等の量を見て普通最低一日そのままするとの事でしたが、私の場合、今抜くと話が進みました。出来るなら身体を自由にした方がびっくりするほど回復が

よくなるとの事でした。「〇〇さんの身体は全く何処も悪くないからね、麻酔もはっきり醒められましたからね、全く健康体だから、もう抜いてしまお、ちょっと早いですがその方がいいわ、しかしあそこは内科に聞いてヤ」と最後を京都の地弁で言われました。「内科に聞いてヤ」との言い方を皮肉に感じました。手術の動機が皮肉られているように思いました。手術の必要性を疑いました。そして何処も悪くないのに肺だけが悪くなるのか、ややこしい病気だとも思いました。

身体に取り付けられたチューブ類は全て取り外され、午後には、私は全く自由な身体になっていました。

手術から数日後退院しました。後日生体検査の結果を聞きに行くのが大変でした。肺カメラの結果を聞きに行く時以上に足はすくみました。

結果は特発性間質肺炎では無く。喜びは大変なものでした。

妻にも付き添ってもらっていたので、妻と共に喜びました。

そして以降、経過観察が始まりました。診察場所は示された診療所でした。

初めは退院後二ヶ月してからあり、後は三ヶ月に一度の間隔でしたが、

相当経ってから私から話を持ち上げ、HD 医師の提案で六ヶ月に一度と言う事になりました。

HD 医師は一年に一度とも言われ、それまではよかったが、

「何だったら止めますかと」言われたときは絶句し怖くなりました。

何が怖いかというと、こちらは命がけで手術し、小さ目の餃子二個程もある肺組織を取られ、そして重要だと思って経過観察を続けたが、何の意味ある結果もなく、はい此れまでと言わんばかりに終り、張本人の HD 医師も関西の大病院の医師かも知れないが、元々そうであった様に永久に無縁の知らぬ存ぜぬの人物になり、此れでは行き摺りの事故に会った様なものでは無いのか、余にも命が軽々しくあつかわれているのでは無いのかと、此れでは怖くてうっかり医療など受けられない、そんな思いからでした。

私は、何時だったか経過観察の間、病気の状態を聞きました。

過敏性とも慢性とも言われていましたが此の慢性が理解できなかったからです。進行する特発性で無かった事が手術で分かったのですから、

治っていくと聞いていたので、慢性は何なのかと思いました。

答えは、まだ炎症が有る言い方でした。其処までは良かったが、

なぜなら治っていくと聞いていたからです。しかし私が更に聞くと、

今後、進行するかも知れないし、このままかも知れない、現在有る部分は慢性のままで治らない様に聞こえる何とも言えない始末の悪い答えだった。

此れでは特発性間質肺炎と何処が違うのかと思いきや大きな不安をもちました。

又或る時、私の肺機能は HZ 医師よりも良いと言われました。

肺機能検査やその他の検査を総合してである。HZ 医師は私から見たらまだ若者である。私の肺機能の方が良いと言われたのだから大変嬉しく思いました。

しかし今後病状が進行するなら喜んででもいられない分けて、分けが分らず結局不安が残

る認識だけが残りました。幸い変化は全く無いと言われていましたが、何の治療法もコントロールも無く手ぶらで構えている様なものだと思います。以上が、間質性肺炎を関西の大病院で診てもらった事です。

更にリウマチ性多発筋痛症についても触れておきたいと思います。

三年余が経ち、リウマチ性多発筋痛症を発症したのですが、

この診療所がリウマチや膠原病経専門でもあり間質性肺炎との関係で行き違い無いだろうと診てもらっていました。

この診療所で使ってはならないプレゾニン（ステロイド）や免疫抑制剤を此の診療所で使用され一生治らないと言われてました。

慢性間質性肺炎で診てもらっていた医師も全部若かったが、ここでのリウマチ担当のKY医師が一番若かったです。此の若さに、私は、慢性間質性肺炎の様に重大病とっていなかったためか大丈夫かと思うよりも、大学で最新の医術を学んでいる筈だからと思いき期待しました。しかしこれが大きな間違いで、

一番古臭くて危ない治療だったのです。そしてこれはリウマチ等膠原病の治療とその薬の使用が現代一般医療において、全く進歩していないと考えられました。実際に飲んだのは先に言いましたがプレゾニン（ステロイド）とプログラフと言う免疫抑制剤で、此の投薬が一番古臭くて危ない治療なのですから。そして此のKY医師から一生治らないと言われてました。私は問い掛けました「治らなくなったのは発症の徴候が現れた時からか、暫らくしてからか、其れとも相当病状が進んでからか」と。二ヶ月程前は健康だったし普通に生活していたから急に一生治らないと言われる事に納得いかなかったからです。しかしKY医師から答えは無く沈黙のあと、99, 9%駄目でしょうと0, 1%残した言い逃れの様な答えで、そして唯々、治らない一点張りしたで。私が正しい答えを知ったのは、全て松本先生の理論を読んでから分かりました。免疫抑制剤を使用すれば見せ掛けの改善とリバウンドを繰返し薬が免疫を阻害する為、一生治らなくなってしまうのです。だから全ての医師は自分で病気を作るから、自信を持って一生治らないと言えるのだと知りました。

此の若いKY医師と世間一般の他の医師も似たり寄ったりだと思いました。

それを少し回りながら言います。

私は、此の診療所に行っている中で松本医院に移りました。この変化をプログラフが急がせました。此の薬を飲んだら、何と言ったらよいのか体力気力も失うと言うか萎縮感があり飲むのを止めました。其の事を電話でKY医師に連絡しました、KY医師は簡単に承知したが次の診察時に別の薬を出しましょうと得意そうに言いました。ショックでした。気色の悪い薬から開放されたと思ったら又次の薬を言われたのです。碌な薬に違いありません。薬に振り回される事を、一週間余先の其の診察日までには絶対に回避しなければならないと思いました。此の切迫感が、此の数日前から妻がネットで出していた松本医院の患者さんの手記から知った松本医院へ行くのを急がせ、そして其の診察日まで既に松本医院に行っていた訳です。しかし止めた筈の診療所の前からしていた予定の診察日に行きま

した。尻切れトンボでは切りが悪いと思ったし、
自然完治する松本医院を得たことをバックに診療所に何か物言い、
復讐心を持ったのかも知れません。しかし実際は丁寧に断ってきました。
私は、手の鍼灸の跡を見せながら、漢方で治す様にしましたと言いました。
前までは一生治らない一点張りだったKY医師に「メリケン粉の様な粉を薬だと言って飲
ませても患者は善くなるんですよ」と言われました。
これは自然治癒が有ると言う事に他ならない事でした。
なぜなら気分だけで良くなると言っているに他ならないからです。
一生治らないと言っているKY医師の口から出るべき言葉ではありません。
何故、彼はそんな事を言ったのでしょうか。一生治らないと言いながら有るわけも無い其の
根拠を当然ながら彼は得ていなかったから本当の事が意に反して彼の体から飛び出してき
たのでしょうか。又、「指が曲がってから私の処へ来ても知りませんよ」とも言われました。
これは反対に自然治癒を否定するものです、なぜなら鍼灸のような漢方的な自然治癒を高
める治療では治らないと言っているのだし、そもそもKY医師は一生治らず薬で抑えるし
か無いと言っているのだからです。結局、KY医師には筋の通った考えが無い事になり、
ズバリ言ってKY医師の治療は間違いに刃物の様に人聞きの悪い話になってしまいます。
そして世間一般の医師もKY医師と全く同じくステロイド等免疫抑制剤を使う危険治療を
行っているのですから、
世間一般の医師とKY医師は何処が如何違うのでしょうか。

—最後に—

もし私が、松本医院で間質性肺炎の原因と正体を知らなければ何時までも不安から開放さ
れなかったでしょう。又、診療所で、それは一般他の何処の病院でも同じですが、免疫を
抑制する誤った治療と投薬を続けていれば痛い痛いと言いながら身体が弱って行き遂には
廃人となり死へと繋がったであろう事が目に有々と浮かびます。間質性肺炎とリュウマチ性
多発筋痛症から助かったのは
松本医院に出会い松本先生の治療法である免疫を高めて治す治療をしていただいたからで
す。一生治らないと言われた事が数ヶ月で完治の目を見ようとしています。松本先生には
本当に治療を超えて命の恩人だと思っています。
間質性肺炎とリュウマチ性多発筋痛症の治療が重なり、その回復が同時でない為、相当良く
なったリュウマチ性多発筋痛症の報告が遅れた事になりましたが中間報告とさせていただきます
と思います。
そして松本先生と最近医師として診療に加わられました息子様、

及び鍼灸の早田先生、看護婦様、スタッフの皆様に御礼と共に感謝いたします。まだしばらく通院しなければならないと思いますので、宜しく願いいたします。

以上